

## MERA 建築社会学を考える委員会公開勉強会 議事録 —現代的住居への建築学/社会学からの視線—

### □ プログラム

- 主旨説明 : 森傑（北海道大学）  
講演 : 貞包英之（映画専門大学院大学）  
討論 : 岩佐明彦（新潟大学）  
森傑（北海道大学）  
司会 : 小池高史（横浜国立大学大学院）

### ■趣旨説明

「建築社会学を考える委員会」は、2005年度から設置し5年が経とうとしている。「建築社会学」という言い方を当初していたが、現時点では「Architecture-Society Studies」という表現をとろうとしている。その理由の一つは、「建築社会学」とすれば社会学の分野で建築を扱うというニュアンスが強くなる。それよりも多様な分野の研究者による、より広い議論が生まれることを望んでいる。

ただ、「社会」というものを長年に渡り扱ってきたのは社会学である。今回はそのフィールドで活躍されている貞包先生をお招きし、ある一つの建築（物）を取り上げたときに、どのような物の見方があるのかということについて議論したい。

### ■講演解説

社会学の中に「住まいの社会学」という分野がある。「建築社会学」というと難しいと感じるが、そのように建物の中で行われるさまざまな行為の場として考えていくと、社会学的となるのではないか。住まいの社会学においても、その中核として行われてきたのは生活実態調査であった。

消費社会論の立場からは、それを消費の場として考えることができる。これまでの社会学で住居が扱われるとき、家族社会学の影響が最も強かった。あるいは経済、制度、民俗といった視点から多くの議論があった。それに加えて消費の文脈から住居について考えてみたい。

消費の場としての建築に着目し、東京における超高層住宅を対象とした。超高層住宅が誕生してから現在までを振り返ると、80年代末からのブームと90年代末以降のブームの2段階に分かれる。

超高層住宅のモードとして、80年代末はジェントリフィケーション、90年代末以降は制度改革の影響があるが、工業地・倉庫・商業地が住超高層住宅になっていて、逆向きのジェントリフィケーションとして捉えたい。

また、80年代末に流行がスタートしたときには、郊外住宅に対抗し、差異を超高層住宅に見いだしていた。90年代末に超高層住宅が加速したときには、外延へ拡大し、超高層住宅の大衆化、多様化が行われた。

超高層住宅の魅力について、80年代末は消費社会の高度化、郊外住宅への対抗として高級なモードが戦後の居住の外部で行われた。90年代末には、郊外住宅に対する利便性の相対化と高層化・大規模化・大量化が見られるようになった。それにより超高層住宅の内部格差の広がりやさまざまな間取りが生まれた。

インタビュー調査をすると超高層住宅の魅力は単なる高さだけではないことから、内部空間の魅力を考えるべきである。そこで身体性の水準を切り口とすると、セキュリティ・防音性・構造など住居の設備・快適性だけではなく、住戸におけるモダン・リヴィングがある。モダン・リヴィングには空間的余白があり、単調さがある。現代都市に広がっている、かなり高度な身体感覚、身体への配慮、清潔さなどが超高層住宅にも求められている。

都市の高度化が出現していて、「商品購買の場」、「労働の場」、「交通の場」、新たに「住居」でも登場し、超高層住宅の商品空間が高度化を担った。感覚水準の高度化によって作られた居住の提供である。都市には多様性があり、多様な感覚水準を享受することが都市の楽しみであるが、ある一定水準の高度化が進んでいくと、多様な感覚水準に耐えられなくなる。いいところで働き、いいところで購買するとなると、住宅でも同様になり、感覚水準にあまり段差があるものをよしとせず、それらをシームレスにつなぐことが超高層住宅の人気になっている。

## ■討論

岩佐：高さが論点ではなく、感覚水準の高度化で「漂白された空間」が作られていることがおもしろい。最近では建築の分野も建物よりもインテリアからスタートしている。1つの価値観でまちが作られることに違和感があるが、感覚水準の高度化はどこに向かうのか。

超高層建築は需要と供給の関係で作られていない。証券化のシステムの中で作られているが、感覚水準の高度化がどういうふうに位置づけられているのか。

森：超高層住宅での格差の補完に関連して、最近アメリカではソーシャル・インクルージョンでコミュニティを作り、多様性を組み込もうとしている。その方法は、アフォーダブル住宅であり見た目は同じ住宅で低所得の人も買うことができる。ジェントリフィケーションに関連して、アメリカの住宅開発ではいかに資産価値を高めて転売するときに利益を得るかという目的を持っている。それは排他性を生む出す可能性がある。アメリカの住宅の場合のキーワードは資産であり、資産としての住まいを高度化することであるが、日本では消費がキーワードであり、消費という見方から現状を分析している。東京の超高層住宅は日本の問題であるが、感覚水準が高度化することに対してどういう価値評価をされているのか？

貞包：今回高さの話はしていないが重要で、高さの魅力を考えたときに、都市を把握すると同時に汚いものを抹消するところがある。どう評価していいのかわからないが、都市の否定という側面がある。都市に暮らしがたい、耐えられないという感性があって、それに対する高さの魅力がある。感覚水準の高度化が拡がっている都市にあるならば違和感がある。

マネー、証券化の話について、超高層住宅はリアルな暮らしの水準というよりもイメージの話であり、イメージとの関わりが強い。超高層住宅は他の住宅に比べてイメージが強くて、よくわからないけどそういう暮らしがしたいという人が暮らしている。投機に結びついて、商品として供給して欲望があるから購入する。マネーの水準と絡んでいるところで起こっている現象である。資産価値について、本人たちも分かっていないところがあり、今後資産価値としてあがっていくのか、どうなるのかわからないが、都心に住宅を作り出していく試みである。勝ちタワーと分けタワーができている。

多様性よりも一律性が見えてきた。感覚のレベルでの平準化、標準化である。さまざまな差異を求めていくけども、それは規定されたなかでの差異である。かなり強い力が働いていて1人ひとりを均質化しているというのが社会学者の中で強い。

花里：不動産屋は高層のほうが高値で売れるが、元麻布ヒルズでは高いところの面積が大きくなっている。こういうのが増えるのではないかと懸念しているが、どう思っているのか？

貞包：高層フロアに窓に面した部屋をつくるのかデベロッパーはいちばんお金になるのでいろいろ考えている。一年経ったら眺望が変わったという話があつて隣地までコントロールできない。

建て詰まり感があるところでは見えないところがある。

花里：眺望権は今ないが、眺望権は将来確立していくのか？

貞包：資産価値を守ることを考えるとそうなる。低い人にも眺望権をとなると難しい問題になる。

均質にあるものなので一戸建てと超高層住宅をどう整合させるのか。

花里：超高層住宅のデメリットは何か？

貞包：管理組合にコミットメントが要求される。巨大なインフラストラクチャーなので維持費が高くなる。ローンを払っても維持費を払えないときに管理組合がどうするのか。また格差の問題がある。快適な面もあるが巨大建造物にたくさん的人が住まなければならぬので、今までとは違うシビアな問題がある。本当の自由が欲しければ一戸建てがいい。

小松：感覚水準の高度化では、高度化という言葉をどうして選んだのか。高度化というよりも同質化、均質化、標準化というイメージが強い。高度化という言葉を使う意図を教えて欲しい。

貞包：洗練というのがいいかもしれないが、商品化の次のことを考えたい。住居の商品化は問題ではあるが仕方ないので、単なる商品を用いたコミュニケーションではない次の世界は何かと考えたい。

小松：あるきっかけがあったのか？

貞包：超高層住宅に住む人がよく言うのは収納の多さとゴミ回収のシステムである。ものを右から左に流すこと、いかに貯めずに流すのかに気を遣っている人が多い。商品に特化した空間が生まれている。商品の消費に重きを置いた空間が昔の郊外住宅では考えられていなかった。

舟橋：超高層住宅でなくとも高層住宅でもあるのではないか。それが先端的に超高層住宅に現れている。イメージを酔っている感じがする。心理学や経済学など際限的な取り組みが可能であり、それによる知見があるのかと思う。

記録作成：松原茂樹（大阪大学）